Dīpaṃkaraśrījñāna が伝えるバリ儀軌について(2)

望月　海慧

はじめに

チベット大蔵経のテンギュルの「秘密部」には，Dīpaṃkaraśrījñāna に関する 7 種のバリ儀軌[1]に関する文献が見られる[2]．すなわち，*Balividhi*[3]，*Mahākālabali*[4]，*Amṛtodayabalividhi*[5], **Jalabalivimalagrantha*[6], *Nāgabalividhi*[7], **Balipūjavidhi*[8] の 6 つの著書と *Caturmahārājabali*[9] の翻訳書である．これらの文献は，テンギュルにおいて同じ箇所にまとめて収録されているわけではなく，必ずしもその伝承や著作意図が同一であったとは限らない．また，いずれもがバリ儀軌を紹介するための小論

---

[1] アレックス・ウェイマン (Wayman 1973: 71) は，供儀に関する語を (1) 供物 (pūjā)，(2) 食供物 (bali)，(3) 火供物 (homa) と区別しており，バリを「食物の供養」とする．また，古代インドとセイロンにおけるバリ儀軌については片山一良 (片山 1974, 1975) が，インドについては森雅秀が（森 1994, 2011）が，ネパールについては山口しのぶ（山口 2005）が，チベットにについてはステファン・ベイヤー (Beyer 1978) が詳しく論じている．

[2] テンギュルには 60 を超える数のバリ儀軌に関する文献が収録されているが，Dīpaṃkaraśrījñāna に関連する 7 論のうち**Balipūjavidhi* はチョネ版とデルゲ版では欠けている．バリ儀軌文献に対する先行研究としては，宮坂宥勝 (Miyasaka 1967) は，*Sumatisiṃha (Blo bzang seng ge) の *Balimālikā* をチベットの翻字テキスト (D. Nos. 3771, 4456) に基づいて校訂している．森雅秀 (森 1994, 森 2011: 138-166) は，Abhayākaragupta の *Vajrāvalī* におけるバリ儀軌の研究を，山口しのぶ（山口 2005）は *Gurumaṇḍalārcanavidhi* と *Cakrasaṃvarasamādhi* と *Balimālā* の校訂テキストと和訳をおこなっている．

[3] Tib. *gTor ma'i cho ga*. C. Ta 189a7-191a5, D. No. 1295, Ta 185b1-187a5, G. Zha 692b1-695a5, N. No. 418, Zha 520b7-523a6, P. No. 2418, Zha 585a4-587a7.

[4] Tib. *dPal mgon po'i nag po'i gtor ma*. Tr.: 'Brom ston. C. Sha 256b3-258a6, D. No. 1765, Sha 256b4-258b1, G. La 351a2-353b5, N. No. 633, La 257a6-259a7, P. No. 2634, La 282b2-284b4.

[5] Tib. *bDud rtshi 'byung ba'i gtor ma'i cho ga*. tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, dNgos grub. C. Tshu 212b4-220b3, D. No. 3778, Tshu 212b4-220b3, G. Nu 523a1-534a4, N. No. 2587, Nu 429a5-439a4, P. No. 4596, Nu 429b1-438a7.

[6] Tib. *Chu gtor dri ma med pa'i gzhung*. Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khrims rgya1 ba. C. Tshu 220b3-221b2, D. No. 3779, Tshu 220b3-221b2, G. Nu 534a4-535b3, N. No. 2588, Nu 439a4-440a6, P. No. 4597, Nu 438a8-439b4.

[7] Tib. *Klu gtor gyi cho ga*. Tr. Rin chen bzang po. C. Tshu 221b2-222a5, D. No. 3780, Tshu 221b3-222a6, G. Nu 535b3-536b4, N. No. 2589, Nu 440a6-441a3, P. No. 4598, Nu 439b1-440a6.

[8] Tib. *gTor mas mchod pa'i cho ga*. Tr. Rin chen bzang po. G. Pu 198a1-204a5, N. 2620, Pu 130a7-134b6, P. No. 4631, Pu 135b1-140b1.

[9] Tib. *rGyal po chen po bzhi'i gtor ma*. Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe bshes sTon pa. C. Tshu 175a5-176a1, D. No. 3772, Tshu 174b6-175b1, G. Nu 467b2-468b4, N. 2584, Nu 383a4-384a3, P. No. 4590, Nu 386b1-387a7.

Acta Tibetica et Buddhica 10: 55-81, 2017.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

であるが，*Amṛtodayabalividhi* だけは，先行する儀軌を注釈する形で著されている．そのために，より詳細な調査を要するために，同論についての詳細は別稿で論じる．また，*Caturmahārājabali* は，著者不明の小論であるが，Dīpaṃkaraśrījñāna がその翻訳を行っているために，関連文献としてここで扱う．以上，*Amṛtodayabalividhi* を除いた 6 種のバリ文献を紹介することにより，彼がチベットに伝えた儀軌の一端を明らかにする．

インド密教のバリ儀礼については，森雅秀が Abhayākaragupta の *Vajrāvarī* に基づいて詳細によりまとめている[10]．バリ儀軌の目的について Abhayākaragupta は，

> ここで述べた儀軌と，他の所作においても，最初と最後に妨害者を慰撫するためにバリを与える[11]．

と述べている．本稿で扱うバリ儀軌の文献のいくつかは，その儀軌の対象である妨害者の相違により著されたものである[12]．

その著作目的の相違については，その他のバリ文献のタイトルからもわかる．上述の 7 論を除くと，テンギュルには次のものが確認できる．

8. Kīrtidhvaja, *Aṣṭāṣṭakenacatuḥṣaṣṭhiyoginībalividhi* (D. No. 1382, P. No. 2097)
9. Prajñārakṣita, *Cakrasaṃvarabalimañjarī* (D. No. 1467, P. No. 2184)
10. Jayasena, *Ḍākārṇavatantrabalividhiratnāśmagarbha* (D. No. 1518, P. No. 2233)
11. 著者不明, **Vajravārāhīnimittaparīkṣābalividhihastapūjā* (P. No. 2309)
12. Durjayacandra, *Sarvabhūtabali* (D. No. 1241, P. No. 2370)
13. Dharmapāla, *Balitattvasaṃgraha* (D. No. 1281,P. No. 2403)
14. 著者不明, *Balividhi* (D. No. 1285, P. No. 2408)

---

[10] 森 2011: 136-166.

[11] Mori 2009, vol. 2: 493-494: *atroktavidhiṣu kāryāntareṣu vādāv ante ca vighnopaśāntaye baliṃ dadyāt*. Cf. 森 2011: 140

[12] ベイヤー (Beyer 1978: 165) は，バリの対象である「客」を，(1) 諸天 (the major daity)，(2) 法の守護者 (the protectors of the Law)，(3) 地天 (the “lords of the soil”)，(4) 六趣味における存在 (beings in the six destinies) の四種に分類している．

15. 著者不明, **Balividhi* (D. No. 1286, P. No. 2409)

16. 著者不明, *Hevajrabalividhi* (D. No. 1287, P. No. 2410)

17. 著者不明, *Hevajrabalividhi* (D. No. 1288, P. No. 2411)

18. Ahovajra, *Hevajrabalikrama* (D. No. 1298, P. No. 2428)

19. Ratnavajra, *Balikarmakrama* (D. No. 1299, P. No. 2429)

20. Kṛṣṇa, *Sarvabhūtabalividhi* (D. No. 1300, P. No. 2430)

21. Saraha, *Sarvabhūtabalividhi* (D. No. 1656, P. No. 2528)

22. Candragomi, **Tārābhaṭṭārikāntarabalividhi* (D. No. 1738, P. No. 2609)

23. Kṛṣṇa, **Balividhi* (D. No. 1821, P. No. 2685)

24. Śāntideva, *Guhyasamājamahāyogatantrabalividhi* (D. No. 1824, P. No. 2688)

25. Vaidyapāda, *Mahābalividhi* (D. No. 1876, P. No. 2739)

26. 著者不明, *Daśakrodhabalividhi* (D. No. 1898, P. No. 2762)

27. Lalitavajra, *Vajrabhairavabalividhi* (D. No. 2000, P. No. 2853)

28. Śrīdhara, *Raktayamāribalividhi* (D. No. 2030, P. No. 2886)

29. 著者不明, **Balividhi* (D. No. 2114, P. No. 2965)

30. Ajapālipāda, *Vajrapāṇinīlāmbaradharabalidhāraṇīvidhi* (D. No. 2154, P. No. 3003)

31. Bhava, *Vajrapāṇinīlāmbaradharabalividhi* (D. No. 2175, P. No. 3023)

32. Dharmaśīla, **Nāgavistarabali* (D. No. 2196, P. No. 3040)

33. Mañjuśrīmitra, **Nāmasaṃgītibhūtabali* (D. No. 2551, P. No. 3378)

34. 著者不明, *Balividhi* (D. No. 2610, P. No. 3437)

35. 著者不明, *Balividhi* (D. No. 2622, P. No. 3449)

36. 著者不明, **Mahākāruṇikabalividhi* (D. No. 2765, P. No. 3586)

37. Śākyaśrībhadra, **Amoghapāśabalividhi* (D. No. 2862, P. No. 3683)

38. Suvāgīśvarakīrti, *Vajrapāṇinīmāmbaradharakalpabalividhi* (D. No. 2874, P. No. 3697)

39. Sugatigarbha, *Nīlāmbaradharavajrapāṇibalividhi* (D. No. 2891, P. No. 3717)

40. Sugatigarbha, *Nīlāmbaradharavajrapāṇināgabalividhi* (D. No. 2892, P. No. 3718)

41. Vasudavajra, *Vajradharabalividhi* (D. No. 2902, P. No. 3729)

42. 著者不明, *Balividhi* (D. No. 2918, P. No. 3744)

43. Buddhaguhya, *Vajravidāraṇānāmadhāraṇībalividhikrama* (D. No. 2927, P. No. 3752)

44. Jñānavajra, **Durdaivaparihārabalikarman kalpadruma* (D. No. 3021, P. No. 3845)

45. Jñānavajra, **Dhruvasambhogāpannaśrīgaṇabaliśubhamaṇimālā* (D. No. 3022, P. No. 3846)

46. Candragomin, *Sitātapatrāparājitābalividhi* (D. No. 3084, P. No. 3904)

47. 著者不明, **Balividhi* (D. No. 3095, P. No. 3915)

48. Abhaya, *Balividhi* (D. No. 3288, P. No. 4111)

49. Nāgārjuna, *Nānātantroddhṛtabalividhi* (D. No. 3769, P. No. 4588)

50. Balyācārya, *Sarvadharmapālabalividhi* (D. No. 3770, P. No. 4589)

51. Vajrākṣobhya, *Mahābalikarmakramavṛtti* (D. No. 3773, P. No. 4591)

52. Jayasena, *Jalabalividhi* (D. No. 3775, P. No. 4593)

53. Vidyājāna, *Balivṛtti* (D. No. 3777, P. No. 4595)

54. Garvaripāda, *Ekavīrabalividhi* (P. No. 4618)

55. Ānandavajra, **Hevajrabalividhi* (P. No. 4689)

56. Kukkuripāda, *Mahāmāyābalividhi* (P. No. 4782)

57. Vararuci, *Mahākālabalividhi* (P. No. 4904)

58. Kṛṣṇanāgārjuna, **Nāthakākāsyabaliyantra* (P. No. 4962)

59. Sugatigarbha, *Vaiśravaṇānuyāyibalividhi* (P. No. 4970)

60. Kṛṣṇa, *Gaṇapatibalividhi* (P. No. 4979)

61. 著者不明, *Balividhi* (P. No. 5010)

62. 著者不明, *Balividhi* (P. No. 5142)

63. 著者不明, *Balividhi*, (P. No. 5150)

64. Sumatisiṃha, *Balimālikā* (D. Nos. 3771, 4456, P. No. 5901, 宮坂 1967)

これらのタイトルから, 単に「バリ儀軌」というタイトルのものから, *Cakrasaṁvara*, *Hevajra*, *Guhyasamāja*, *Nāmasaṁgīti* などの特別なタントラに基づくもの, 瑜伽女 (yoginī), 忿怒尊 (krodha), ターラー, 閻魔 (yamāri) などの特別なバリの対象, 水

供物 (jayabali) などの特別なバリなどを記述した文献があることがわかる．これらの文献を分析することにより，バリ儀軌の基本的マニュアルとそのバリエーションが明らかになるであろうが，それは本稿の及ぶものではない．

1. *Balividhi*

そのタイトルには，「バリの儀軌」としかないが，冒頭の偈に，

> 障碍となる者たちの障碍を鎮め，諸業を成就させるために，すべての魔鬼に供物を供える儀軌が正しく書かれる[13].

にあり，末尾の偈に，

> ベンガルに生まれた比丘 Dīpaṃkaraśrījñāna が師を喜ばせてから獲得したこの供物そのものを明らかに解説した一切の魔鬼のバリ儀軌である[14].

とあることから，その対象は魔鬼 (bhūta, ’byung po) で，邪悪な力をもつ霊となる．ただし，その後にも「梵天・自在天・月日・ヴィシュヌなどの世間の守護者，人・非人，浄心天，地天，ナーガなどを調伏して」とあることから，それは一般に邪悪な存在を意味しているのかもしれない．

続けて，一切衆生を円満に浄化する儀軌としてバリ儀軌が述べられる．諸尊の観想と身口意の加持の前行に始まり，バリとなる食物などの供物に加持のマントラを添え，最後に衆生利益の請願が述べられる．その内容から，本儀軌は，特定のバリ儀軌のマニュアルを示すものではなく，バリ儀軌の一般的在り方を示したもである．

2. *Mahākālabali*

本論におけるバリの対象は，そのタイトルにあるように，「大黒(Mahākāla)」であり，それを行う場所は「屍林」となる．その構成として，冒頭に，

---

[13] D. No. 1295, Ta 185b1-2: *bgegs rnams ’tshe ba zhi bya dang // las rnams thams cad bsgrub pa’i phyir // ’byung po thams cad gtor ma dag / sbyin pa’i cho ga yang dag bri //*

[14] D. No. 1295, Ta 187a4-5: *bhaṃ ga lar skyes dge slong ni // mar me mdzad dpal ye shes kyis // bla ma mnyes las thob gyur pa // gtor ma ’di nyid rab tu bshad //*

バリに三種あり，自分に特別な所作と，特別なバリの所作と，特別な客の所作とである[15].

と述べ，大黒のバリを三種の観点で解説している．最初の自分に特別なものについては，諸尊の観想と身口意の加持が述べられているだけである．すなわち，諸尊と身口意については，実行者独自のものであることから具体的な内容は示されていない．特別なバリについては，大黒を対象とする場合に特別な器を用いることが述べられ，その器具や供物の特殊性が述べられている．特別な客は，バリの対象となる大黒であり，その観想法が特別なマントラとともに述べられている．このことから，この著書は，大黒のバリ儀軌のうち他の儀軌と相違する点を解説したものである．

3. *Amṛtodayabalividhi*

本バリは，先行する儀軌の言葉を引用する形で解説するスタイルで書かれたものである．ただし，その先行する儀軌が誰によるものかについては，確認できていない．また，解説する際に，*Bodhicaryāvatāra* や *Nāmasaṃgīti* などの文献を引用しながら解説しており，他の小論よりも長いものとなっている．

4. **Jalabalivimalagrantha*

本バリは，慰撫の対象に関する言及はなく，バリの内容として「水」を取り上げたものである．「水」の意味については，誓願文に，

冷たい味が煩悩の火に苦しむ有情の苦を寂滅する[16].

と述べられ，コロフォンにも，

---

[15] D. No. 1765, Sha 256b5: gtor ma la gsum / bdag khyad par du bya ba dang / gtor ma khyad par du bya ba dang / mgron khyad par du bya ba'o //

[16] D. No. 3779, Tshu 221a6-7: dam chos bdud rtsi thams cad mkhyen pa yi // zhal nas gsungs pa bsil ba'i ro 'di yis // nyon mongs 'bar ba'i me yis gdungs pa yi // 'gro kun rtag tu sdug bsngal zhi byed shog //

縁と障碍のすべてを転じて一切の功徳を近くに集める無垢なる水のバリの典籍で，軌範師 Dīpaṃkaraśrījñāna による著作を完成する[17].

と述べられている．儀軌の次第は，諸天の観想，身口意の加持に始まり，空性の観想，器の加持，三昧耶のバリ，智のマントと続いている．すなわち，本論はバリの供物として水を用いた儀軌の在り方を簡単に説明したものである．

5. *Nāgabalividhi*

本バリは，妨害者であるナーガを慰撫する儀軌を述べたものである．著作スタイルは，前半が 32，後半が 30 の全 62 パーダの偈頌からなり，中間にマントラが挿入されている．ナーガにも供えられるバリとしてミルク・ヨーグルト・バターの三白に加え[18]，蜂蜜・糖蜜・砂糖の三甘が言及されている．また，バリの目的は，龍王から生じた三毒である眼に見える病気の毒・食べ物の毒・心の毒を寂滅することとされている

6. **Balipūjavidhi*

本バリは，チョネ版とデルゲ版では欠けており，他のバリと伝承が異なる可能性がある．全体の構成は，冒頭に，

外の供養に，酒の加持と，酒の供養と，手の加持と，手の供養と，マンダラの加持と，マンダラによる供養と，輪の加持と，輪の供養と，供物の加持と，供物による供養と，聚輪の加持と，聚輪による供養である[19].

---

[17] D. No. 3779, Tshu 221b1-2: *rkyen dang bar chad thams cad zlog par byed pa yon tan thams cad nye bar sdud par byed pa chu gtor dri ma med pa'i gzhung slob dpon dPal mar me mdzad ye shes mdzad pa rdzogs so //*

[18] ナーガに牛乳が供えられることについては，森 2011: 148, 154 を参照.

[19] P. 4631, Pu 135b1-4: phyi rol gyi mchod pa la / chang byin gyis brlab pa dang / chang gis mchod pa dang / lag pa byin gyis brlab pa dang / lag pa mchod pa dang / maṇḍal byin gyis brlab pa dang / maṇḍal gis mchod pa dang / dkyil 'khor byin gyis brlab pa dang / dkyil 'khor gis mchod pa dang / gtor ma byin gyis brlab pa dang / gtor mas mchod pa dang / tshogs byin gyis brlab pa dang / tshogs gis mchod pa'o //

と述べられているように，酒・手・マンダラ・輪[20]・供物・聚輪の 6 項目に対する加持と供物を解説するものとなっている．これらのそれぞれにおいて観想法とマントラが説かれているのだが，最後の聚輪に対する解説は欠けている．また，その解説において，供養と賞讃，懺悔と律儀，請願と廻向，随喜と勧請という項目が用いられている．これは，『菩提道灯論細疏』で論じられる七種供養に関連するものである．このことは，本論のタイトルに「供物 (bali) と供養 (pūja)」が示されているように，バリを供養で解説することが意図されている．

7. *Caturmahārājabali*

本バリは, Dīpaṃkaraśrījñāna の著書ではなく, 著者不明の儀軌の翻訳書である．短い儀軌文献であるために，誰かが著したものというよりも，彼がインドで学んだ儀軌文をチベットに伝えたものと考えられる．バリの対象が四天王という特別な客であるために，その内容も大黒のバリと同じように，特別なバリと特別な客を解説する在り方で解説されている．特別なバリは，観想により甘露を降らせることであり，特別な客は，ターラーを観想することで，四天王を招くことである．その目的は，四天王に，四方の四魔，十八の大魔などから守護してもらうことである．

まとめ

以上のことから，以下のことがわかる．まず，テキスト伝承について，*Balividhi* は情報なし．*Mahākālabali* は ’Brom ston が翻訳しているので，Dīpaṃkaraśrījñāna が彼に出会った後の著作と考えられる．*Amṛtodayabalividhi* は翻訳官の Khu dNgos grub の翻訳．**Jalabalivimalagrantha* はその奥書に，

> 軌範師自身に請願者である Kun ston Legs pa'i shes rab が資糧の支分を請願してからマンユルの村で著書を書いた．そのパンディタ自身と翻訳官の Tshul khrims rgyal ba が翻訳をした[21]．

---

[20] 前項のマンダラが “maṇḍal” とサンスクリットの音写語であるのに対して，こちらはそのチベット語訳に相当する “dkyil ’khor” とあるが，解説では「身体の輪 (lus kyi dkyil ’khor)」とある．
[21] D. No. 3779, Tshu 221b2: slob dpon de nyid la zhu ba po Kun ston Legs pa’i shes rab kyis tshogs bsag pa’i yan lag tu zhus nas Mang yul gyi grong du bzhung bris so //

と述べられている．*Nāgabalividhi* と **Balipūjavidhi* は，Rin chen bzang po が翻訳したので，著作時期は近いであろう．*Caturmahārājabali* は Dīpaṃkaraśrījñāna と翻訳官の dGe bshes sTon pa が翻訳した．彼が ’Brom ston であるのならば，*Mahākālabali* と同時期と考えられる．

その内容については，次のようにまとめることができる．*Balividhi* は，一般的なバリの在り方を示したもの，*Mahākālabali* と *Nāgabalividhi* と *Caturmahārājabali* は，特別なバリを対象とした儀軌の在り方を示したもの，*Amṛtodayabalividhi*,は，先行するバリ儀軌の解説書，**Jalabalivimalagrantha* は，特別なバリそのものを示したもの，**Balipūjavidhi* は，バリを供養で解説したものとなる．

テキスト和訳

1. *Balividhi*

インドの言葉で，*Balividhi*,

チベットの言葉で『バリの儀軌』

文殊師利菩薩に敬礼する．

> 障碍となる者たちの障碍を鎮め，一切の業を成就させるために，すべての魔鬼に供物を供える儀軌が正しく書かれる．

そこで最初に，瑜伽の心地よい座に坐り，oṃ svabhāva śuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāva śuddho ’haṃ と言うこのマントラを三度唱えて，一切法は自性清浄であることをさらに信解すべきである．oṃ śūnyatā jñāna vajra svabhāva ātmako ’haṃ と言うマントラが唱えられる．三界は始めから不生で，自性により光り輝き，考察されず，不二の真如の自分の心の顕現だけを把握して，広大な虚空界の中央に法源の印が上にとどまることを修習し，その中央に種々の広大な蓮花と，月などの輪の上に自分の守護尊の天の瑜伽を起こすべきである．

その次に，心臓の種子から生じた光により有情を残らず顕現させる前行をともなうことで三千の大千の主の姿で行ずる梵天などと，自在天の王などと，月と太陽と

Viṣṇu などの一切の世間の守護者と，人と非人のすべてと，浄心天と地天などと，ナーガなどの衆生を正しく調伏して，法源の中央で観想する．

そこで，

最初に上の方向の[22]色界にいる天は，髪の冠と白い三昧の印契と，白い光線をもっている．

欲界にいる欲界の自在天などの諸天は宝石の冠を保持し，種々なる荘厳と光をともなっている．

上の日月などのように，それぞれの方向の主はそれぞれの色と幟幟などをもって，次第のままに修習する．

浄心天と地天などと八龍王も自分の智慧薩埵の心臓の種子から生じた三種により智である毘盧遮那などを色界において次第に成就すべきである．

そこで，今度は一切衆生を円満に浄化する儀軌が説かれるべきで，自分で智慧薩埵の心臓の種子から一千万の月の光と同じ白い文字の oṃ を月輪にとどめ，すべての光から放たれたものを頭上に観想して，その光により梵天などの色において行ずる諸天が毘盧遮那の相を成就させるべきである．その次に自分の智慧薩埵の心のその種子自身からヨーガの文字の hūṃ が宝石の紺碧の色をもち，紺碧の光を放ち，

月輪の中央にあるそれに光が広がることを観想して，その光の雲により制圧されてから，欲界において行ずる諸天と世間の守護者を浄化し，阿閦仏の身体を成就することを円満に修習すべきである．

その直後に，自分で智慧薩埵のその心臓から赤い文字の ā が放った赤い光の集まりを月輪にとどめ，普く広まるその赤い光が広まることで浄心天と，地天と，八龍王を円満に浄化して，無量光如来の成就をなすべきである．世間の守護者などの衆会をともなうそれらのすべてが自分の種の如来の身体で成就したそれを身体として行じた者たちが毘盧遮那如来の種姓である．欲界において行ずる諸天と世間のも

[22] このパーダのみ 6 音節であり，偈頌ではないのかもしれない．

のたちは，阿閦の種姓である．浄心天などは，無量光の種姓である．それ故に色界で行じた者などから八龍王までのそれぞれが自分の種の如来の身体で成就し，一切の如来の灌頂により灌頂して，頭に金剛薩埵の印をなして，それらにより身と口と意の加持をなすべきである．

それからそれらの前で食べ物の用意などの何れかの所持しているものを探し，最初に yaṃ が転じた風輪に弓の形のような幢による特徴を観想し，その上に赤い raṃ が転じた火輪で三角に燃え上がる形態をもつものと，その上に文字 ā が転じた頭蓋骨を円満に修習し，その頭蓋骨の中央に五甘露の bhrūṃ āṃ jṝṃ khaṃ hūṃ と言う五如来の種子の加持を観想し，その次に手と煖などの集まりにより正しく成就し，oṃ の文字による加持を見なさい．その上に hūṃ の文字から成立した金剛を観想し，それから oṃ の文字の光による一切の如来の智の甘露を導いてから，その五甘露の上に吸収され，その直後に燃焼と煖と oṃ の文字とその金剛自身を受け取ることを観想し，arghaṃ など供え，そのように成就する甘露が如来のすべての集まりの舌金剛から放たれた光の管により導かれることで満足するべきである．それから金剛と鐘を正しく受け取り，一切の魔鬼のバリのマントラによりそれらのものを七度の間加持し，

> それからそれらに供えて，金剛を速やかに繁栄させてから，金剛と結合してから仮設された一切の絵を確実に取り除くべきである．
>
> それから鐘を鳴らして，勝者が空性を理解するようになる最高を歓喜する声によりこの偈を三度述べるべきである．
>
> 有は自性により清浄で，自性そのものにより有を取り除くべきで，自性が清浄の最高の薩埵が有の最高を成就させる．

そこで供物に対する加持のマントラはこうである．oṃ ākāro mukhaṃ sarvadharmāṇāṃ ādyanutpannatvāt / oṃ āḥ hūṃ phaṭ svāhā と，この真実のマントラを三度か七度述べる．

> 円満な菩薩たちが随念してバリを加持する．例えば，甘露味によりそのようにすべてに満足するべきである．

真実の酒を与えてから耐えるべきことに行くことを請願するべきである．

そこに行くことを請願するマントラはこうである．

oṃ あなたは衆生利益を普くなされ，相応する成就を授け，仏の境に行ってからは，さらにまた，行かれることを請願する．

oṃ āḥ hūṃ muḥ /

不生と不滅で，始めから自性清浄で、これらのすべての有情を見てから，この大きな行くことはなすべきことであり，供物の布施の儀軌をよく書いてから，

自分で近くに集めたその福徳によりこれらの有情すべて正等覚の器になりなさい．

ベンガルに生まれた比丘 Dīpaṃkaraśrījñāna が師を喜ばせてから獲得したこの供物そのものを明らかに解説した一切の魔鬼のバリ儀軌である[23]．

偉大な軌範師 Dīpaṃkaraśrījñāna による著作を完成する．

2. *Śrīmahākālabali*

インドの言葉で，*Mahākālabalināma*

チベットの言葉で，『吉祥大黒尊供物』と言われる

吉祥なる兄弟に敬礼する．

屍林などの好ましい場所で，菩提心を先に準備し，死骸の成就と死骸にバリを供えている．バリに三種あり，自分に特別な所作と，特別なバリの所作と，特別な客の所作とである．

最初に，自分自身が刹那において世尊を揺らさずに修習し，身口意の知恵を加持するべきである．

[23] この最後の句には，著者の紹介があることから，上の句と分けるべきなのかもしれない．

第二に，結合 (bandha) や頭蓋骨の中に人肉や血と肉で飾られた主尊のよいバリを用意し，それがなければ，他の多くの器で飾られたものを用意する．バリを用意し終わり，oṃ svabhāva viśuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāva viśuddho ’ham と三度述べることでバリを把握せずに空を修習し，空の中から青い yaṃ が転じてから緑色の風輪が再びとどまる形が弓のような楕円形になり，矢の幡により特徴づけられる最高の二つの弓だけを修習し，その上に raṃ から火輪が三角に燃える熱だけを修習し，その上に āḥ が転じてから広くて大きな頭蓋骨だけを観想する．その上にその白い hrīḥ から光を放ってバリにバターを放つことで，バリの不浄と器の垢を浄化することを観想する．そこで，hrīḥ も甘露を請願することを観想し，それからバリより何肘か上に raṃ から日輪が，その上にその藍色の hūṃ が転じてから九辺の割れ目をもつ黒い金剛だけを観想し，その上に raṃ が転じてから日輪を，その上に藍色の hūṃ だけを起こしてから座すことを観想し，hūṃ から光を放ってから金剛の割れ目から来て，金剛の raṃ を後から二つに分けてから来たことで，最高の二つの弓による幡を振ることで，幡で風が起こるので風により火を隠し，火で頭蓋骨を煮て，光も放ってから来たことで，仏と菩薩と如来の心臓から知恵の五種の甘露の雨が降ることを観想し，言葉で oṃ ākāro mukhaṃ sarvadharmānām ādyanutpanntatvāt oṃ āḥ hūṃ phaṭ svāhā と言うマントラを五度か七度述べ，āḥ hūṃ と，そのように述べる金剛の上の太陽と下の太陽の二つの hūṃ と，三つの氷の先端が溶けて，先端で甘露に溶けることを観想し，それから自分の手で金剛を受けてから三度かき混ぜることで白い甘露が取り除かれることを観想する．それから自分の手の金剛を把握せずに修習する．それが，特別なバリの所作である．

特別な客への所作は，バリの前の空間に raṃ が転じてから太陽の輪を，その上に藍色の hūṃ だけを観想し，それから光を放って一切の衆生を照らし，罪障を浄化し，一切の吉祥なる主の身体になり，それを再び集めることで吉祥なる主は藍色の身体で一面二手の右左に無知を断じる剣と血で満たされた頭蓋骨をもち，オレンジの頭髪が上になびき，牙を露出し，濡れた人の頭の首輪と虎の皮のスカートを身に着けていることだけを観想し，その心臓に raṃ が転じてからその日輪の上に藍色の hūṃ から右に赤黒い phaṭ だけを断じてから太陽の座に吉祥で善をもつ赤黒い身体の大黒は一面二手の右左に栴檀のこん棒と血で満たされた頭蓋骨をもち，左足を少し伸ばし，右を少し曲げた姿をし，骨の端を取り去ったものが付された外套

を緩く三つに重ねて金の帯を縛ったものを修習する．それから自分の心臓から光を放つことで，須弥山の東方の階段から客と主従が招かれ，jaḥ hūṃ baṃ hoḥ sa に同化する．吉祥なる善をもつ者にもそのように同化する．身口意を加持する．また，主尊の左方向に水色の yaṃ が転じてから風輪が，その上にその黒紫の bhyoḥ から光を放って衆生を照らして罪障を浄化し，一切の吉祥なる明妃の身体に再び集めるので吉祥なる明妃は身体の色が黒紫で赤いロバに乗り，一面二手で，右左に剣と血で満たされた頭蓋骨をもち，牙を露出し，オレンジの頭髪が上になびき，骨の飾りをもち，鞍の帯は蛇から作られ，前と後ろに死体を結び，病気の袋と，針の球を保持することだけを修習する．その心臓から raṃ が転じてからその日輪の上にその黒紫の bhyoḥ から左方向に黒い bhyoḥ だけを断じて，吉祥なる Remati は，黒い身体の女性で織られた服を着て黒いサンダルをはき一面二手で，右左に剣と頭蓋骨もち，牙を露出し，剛毛で，鞍の帯は蛇から作られ前と後ろに死体を結び，病気の袋と，針の球を保持することだけを修習する．

それから自分の心臓から光を放って来たことで，三十三の勝者の住居の北東端の海の端に浮かんでから知恵の明妃が衆会とともに招かれ，jaḥ hūṃ baṃ hoḥ sa に同化する．ロバに乗った明妃にもそのように同化する．それから身口意を加持する．それから唱えたならば，自分の心臓にある raṃ が転じてから日輪の上に藍色の hūṃ を起こしてから座して，oṃ caṇḍa mahākāla vajra daṃṣṭina hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ と言うマントラにより右に回ってから有を観想し，その自分の口から生じた主のお顔に至り，臍から生じた自分の臍にも自分の口から生じた主のお顔にそのように周りを回ることを観想し，唱えるべきである．吉祥なる明妃に唱えるならば，周りで唱えるべきではなく，吉祥なる明妃を把握し，oṃ roru roru tricapala āśugmema hūṃ bhyoḥ jhaḥ jhaḥ と唱えるべきである．唱えることなくバリを供えるならば，四つの生起を把握せずに，舌の上にそれぞれの hūṃ も置かれる．その四つの hūṃ が転じてから，舌の先に金剛を舌の後ろに管があることを観想し，主に供えるならば，hūṃ と述べることでバリに幡をを刺してから請願を観想し，hūṃ oṃ caṇḍa mahākāla kha kha baliṃ takhāhi と三度述べることにより供える．oṃ caṇḍa deva mahākāla baliṃ khāhi khāhi と三度言うことにより明妃の主従に供える．

それからの望む目的を請願する．

oṃ あなたは衆生利益を普くなされ，相応する成就をなされ，仏の境に行ってからもさらにまた，衆生利益に行く[24].

oṃ āḥ hūṃ muḥ と言うことで知恵薩埵に行く．四つの生起を把握せずに修習し，バリは大地を浄化し，大地を害する．

Dīpaṃkaraśrījñāna が著し，翻訳官の ’Brom ston が翻訳した．

oṃ 三つのものから生まれた吉祥なる Mahākāla よ，oṃ 守護尊の Rakṣā の分に bhyo，守護尊の黒女の分に bhyo，心臓にいる Rakṣā の分に bhyo.

3. *Amṛtodayabalividhi*

インドの言葉で，*Amṛtodayabalividhināma*

チベットの言葉で，『甘露が生じるバリ儀軌』

（本文和訳別稿）

「甘露が生じる」と言う供物の儀軌を完成した．

インドの賢者 Dīpaṃkaraśrījñāna が著し，翻訳して，翻訳官の Khu dNgos grub が校訂した．

4. ***Jalabalivimalagrantha***

『水バリ』による儀軌である．

大悲に敬礼する．

水バリの法具の前で前行をなすべきで，自分が最初に成就する方法のままに天のヨーガをなし，身と口と意の三つを加持すべきである．それから，oṃ svabhāva śuddhaḥ sarvadharmāḥ svabhāva śuddho ’haṃ と述べる．自分のものではない器と中身のすべてを空性と観想して，それから空性の状態から前に器としてあるものの前

[24] 典拠の確認はできていないが，テンギュルに 30 を超える文献に引用を確認でき，Dīpaṃkaraśrījñāna は同じ偈を *Tārāsādhana* (D. No. 3685, Mu 316b7-317a1) においても引用する．Cf. 望月 2007: 107.

方に緑の paṃ をそれぞれ観想し，それらが転じてから種々なる宝から成立したそれぞれの器を観想し，器が加持される．中身は，それぞれの器の中に甘露の自性と，種々なる薬から成立した樹木と，種々なる宝から成立した宝の瓶と絹などのさまざまな服を観想する．その薬木の円満な根を突き刺し，美しい葉と美しく広がった熟した花と実を観想し，その木の本体に身口意の智の自性をもつ oṃ āḥ hūṃ ho を順序どおりに並べるべきである．

三昧耶のバリが浄化される．それらの文字から光を放つことで十方のすべての善逝の三昧耶を請願してからそれらの心臓から智の甘露の乳色の海のような水の流れを招いてから来て，それらすべてが一味になることで香りと味が一体となった円満な効力を見るべきである．

智のバリを引き起こすべきである．それから成就者自身の心臓から釣り針と輪縄のような光が生じてから五種の有情それぞれが自分の色により前の空間に現れるようになすべきである．

客が招かれる．金剛の掌の準備や三叉の鉾の印契とこのマントラにより供えるべきである．この oṃ namaḥ sarvatathāgata avalokite sambhara sambhara hūṃ により声の強弱無しに等しく獲得することを観想する．oṃ ru ru sphuru jvala tiṣṣra siddha locāne sarva artha sādhane svāhā と，この二つのマントラを七度ずつ繰り返して供える．後のマントラにより，一切の衆生の観想において何であれ望んでいる享受と五欲楽などのそれぞれの認識と同じものの獲得を観想する．それが，財物の布施である．それから法施は，お顔から説かれた経典の偈をできる限りの発音でなすべきである．

それから誓願をなす．それから真実を磨くことは，仏の諦と，法の諦と，僧の諦と，密呪と，明呪と，印契と，三昧と，自分の清浄な想の力によりそれぞれの衆生のすべての害を寂滅してから中断と損害を捨てて，三昧耶にとどまりなさい．それから誓願は，

> 正法の一切の甘露を知るお顔から説かれたこの冷たい味により煩悩が燃やす火に苦しむすべての有情は常に苦を寂滅しなさい[25]．

[25] Cf. Sumatikīrti, *Pratiṣṭhāvidhi,* Tib. D. No. 3139, Pu 321a4-5.

などと設定されている．

それから一切衆生の身口意の三つの障碍を浄化してから二資糧を円満にして，それぞれの想と同じ広大な享受を得てから三昧耶にとどまり，無分別智を考察してから自分に対して利益をなす想により oṃ muḥ と述べてから指をならしてからそれぞれの場所に来ることを見るであろう．

縁と障碍のすべてを転じて一切の功徳を近くに集める無垢なる水のバリの典籍で軌範師 Dīpaṃkaraśrījñāna による著作を完成する．

その軌範師自身に請願者である Kan ston Legs pa'i shes rab が資糧の支分を請願してからマンユルの村で著書を書いた．そのパンディタ自身と翻訳官の Tshul khrims rgyal ba が翻訳をした．

5. *Nāgabalividhi*

インドの言葉で，*Nāgabalividhi*

チベットの言葉で，『龍のバリ儀軌』

尊母聖ターラーに敬礼する．

自分自身の天の我慢により慈愛と悲心を菩薩は何度も修習すべきで，前にある paṃ から［生じた］蓮華は赤い色で，八つの葉の上の八つの phuḥ から八龍王が生じる．[1-6]

それから心臓の光と oṃ phe phu と言うことで八大龍王を衆会とともに招くことに入る．三つの白（ミルク，ヨーグルト，バター）と三つの甘いもの（蜂蜜，糖蜜，砂糖）の甘露をともなう三昧耶の智で龍たちに供養する[26]．[7-12]

それからバリを加持して，器は haṃ から宝石が，とても美しくて，優雅で，広大に広がり，大きくなることを観想する．[13-16]

[26] ナーガに牛乳や乳粥が供えられることについては，森 2011: 154 を参照．

その大宝の最高の器の中に三つの白と三つの甘いものの甘露をともない，器が充満していることを観想する．その上の三文字と色と香と味を浄化してから甘露の最高の百の味をともなう．[17-22]

右は最高の布施の印契で，ha ho hri paṃ を浄化してから，如意樹を観想すべきで，葉と枝のすべてを七宝の甘露が満たしている．[23-26]

無量を観想してから，bhrūṃ から甘露の雨が降るので，バリで満ちていることを観想する．oṃ āḥ hūṃ と三度述べる．すべての客は，舌からで，hūṃ から金剛の管で吸収する．[27-32]

oṃ ananta baliṃ yidaṃ kha kha khāhi khāhi / oṃ takṣakaḥ oṃ kulika / oṃ vāsuki / oṃ śaṃkhapāla / oṃ mahā padma / oṃ varuṇa / oṃ nanda nāgarājāya / oṃ pheṃ 龍王の藁はない[27]．baliṃ yidaṃ kha kha khāhi khāhi /

Ananta と Takṣakaと Karkatika と Kulika と Vāsuki と Śaṅkhapāla と Padma と Varuṇa と，[33-36]

Nanda と Upananda と Sāgara と Mahāsāgara と吉祥光と大光と大きな身体と蛇の層と大力とである．八大龍王が衆会をともなってここに行き，供施のバリを享受する．[37-42]

この美しい三白のバリは，三甘の乳海をともない，宝石で飾られた階梯をもち，龍の害から守り，適当なものをこれに変えなさい．[43-47]

この供施のバリを保持して，我々衆会をともなう者たちに龍から転じた病である見える毒と食べ物の毒と想の毒などのそれらすべてを寂滅しなさい．[48-53]

自分で大切なものをもち，自分に対して損害をなさず，常に慈愛の心と父母のような心で見なさい．[54-57]

さらにまた，行為から生じた言葉と誓願から遅れることのない危険をともなうすべての龍の集まりは，この言葉から受け継いだものを把握し，それぞれが自分の場所に行きなさい．[58-62]

---

[27] ここにチベット文 (klu'i rgyal po sog ma med) が挿入されている．

その次にバリを供え，真実を磨き，法を解説するべきである．

偉大な龍のバリで，Tārā の御足の塵に触れた偉大な賢者の Dīpaṃkaraśrījñāna による著作を完成する．翻訳官の Rin chen bzang po が翻訳した．

6. *Balipūjavidhi

バリ供養の始めである．
世尊サンヴァラに敬礼する

外の供養に，酒の加持と，酒による供養と，手の加持と，手の供養と，マンダラの加持と，マンダラによる供養と，輪の加持と，輪による供養と，バリの加持と，バリによる供養と，聚輪の加持と，聚輪による供養である．

そこで最初に，酒の加持は，頭蓋骨などの中に美味しい酒をこぼさずに注ぎ，自分の三昧耶薩埵を起こした前に座し，自分の左手の掌に oṃ を観想し，その自分の口を信じることで oṃ の光により酒を三昧耶の甘露と観想し，右の掌に āḥ を観想し，āḥ が口に触れることで不生の甘露を観想し，二手を合わせた間に hūṃ を観想し，hūṃ から智の甘露により招かれ，酒を智の甘露と観想し，二手により法源の mūdra をともない，法源の輪に赤い ho だけを観想し，ho から光を放って智の輪を招いてから虚空に入り，自分の三昧耶の輪とその両者に等しく入る菩提心を酒に請願することで酒の三昧耶と智の甘露を観想し，薬指で酒に法源だけを書き，三つの角に三音 (oṃ āḥ hūṃ) を，中央に ho を［おく］．

それから ho から受けて，oṃ āḥ hūṃ をなし，頭の上に撒き，師が身口意の成就を得ることを観想する．それから自分の臍の藍色の hūṃ を心の天衆が囲むことを観想して，oṃ āḥ hūṃ ho と撒く．心臓にある赤い āḥ を言葉の本質や天衆として撒く，頭の白い oṃ を身体の本質や天衆と観想して撒く．蘊と界と処などのすべてを天の自性と観想して撒く．それから家に撒き，金剛の家を加持し，供養する物を撒く．世間と出世間の無量の供物を加持し，兄弟と姉妹に撒き，勇者と瑜伽女を加持する．酒の加持と，酒の供養である．

手の加持と手の供養は，左手の掌に蓮華の五葉と臍の六つを観想し，臍に oṃ baṃ を，葉を左に回し，haṃ oṃ hriṃ moṃ hriṃ hriṃ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ を観想す

る．そしてまた，最初の三昧耶の第二字である智の文字を招いて同化し，それらの文字も oṃ baṃ は金剛亥と，haṃ oṃ nama は青と，hriṃ moṃ は白い惑わすものと，hriṃ hriṃ は黄色い守護するものと，hūṃ hūṃ は緑の怖がらせるものと， phaṭ phaṭ caṇḍika は煙の色をもち，天の本質と知るべきである．それから指の親指と人指し指と中指と薬指と小指に oṃ haṃ / namani / svāhā hūṃ / bho śad he / hūṃ hūṃ ho の五つを集めて，phaṭ phaṭ haṃ を観想する．それらの文字も，最初の三昧耶の文字，第二の智の文字を招き入れ，それらの文字も本質である天で，金剛薩埵と，毘盧遮那と，無量光と，阿閦と，宝生と，不空成就を見るべきである．手にある四大種は，堕すものと，殺すものと，挽くものと，舞踏の主と，蓮華の網をもつものと見るべきである．その勇者と勇女の二人も尊父と尊母として加持すべきである．手の裏にある三輪に二十四の勇者を上のように起こし，それから手の供養は，表裏の順序どおりに oṃ haḥ / oṃ vajra puṣpe a hūṃ / vajra dhūpe a hūṃ / oṃ vajra dīpe a hūṃ / vajra ghanadhe a hūṃ / vajra naivedye a hūṃ と言うことで花と香と灯火と献食と香水などにより供養する．

内の供養は，oṃ haḥ と言う順序どおりに色，声，香，味，触の女尊により供養し，oṃ sarva viśiprasara puca mega samuntra samaye hūṃ と述べる．真実の供養は，明妃に五甘露により無量に満たされた頭蓋骨で供養し，oṃ āḥ hūṃ amṛte hūṃ と言うことで供養するべきである．裏の輪に勇者の種子であるそれぞれの hūṃ を三文字により供養し，それから尊父と尊母の八足により賞讃し，百文字により懺悔し，身口意の三つの迷乱に耐えることを請願し，身口意の三つの成熟を請願し，何れかの善根がある一切の衆生に廻向する．利益は，身口意の三つの罪過の浄化と，身口意の三つの加持と，食べ物と財産の享受を広げ，未来に虚空行に生まれるであろう．

マンダラの加持は，鏡の面のようなマンダラに，oṃ vajra bhūme a hūṃ とマンダラと地方を塗るべきである．それから oṃ vajra rekhe padma maṇḍala hūṃ と述べることで蓮華と日月の上に須弥山と四洲をともない，須弥山の頂上にある無量宮は屍林をともない，客である仏と法とサンガと護法の守護者をともなうものが起こされる．oṃ haṃ mahāvīra nama と三度中央に供え，oṃ yaṃ sarvavideya nama と東の勝身に，oṃ raṃ jamburis nama と南の贍部に，oṃ laṃ aparahoye nama と西の牛貨に，oṃ baṃ kuta kute nama と北の倶盧に，oṃ yaṃ upadevaya nama と東の右の二種にそれぞれの花を三度ずつ供え，oṃ raṃ upadevaya nama と南の右と左の両方

に三度ずつ花をそれぞれに供え，oṃ laṃ upadevaya nama と西の右と左の両方に三度ずつ花をそれぞれに供え，oṃ baṃ upadhipaya nama と北の右と左の両方に花をそれぞれ三度ずつ供え，それから内の方向と境界に oṃ a gaja ratnaya nama と東の象に，oṃ raṃ suśa ratnaya nama と南の大臣に，oṃ laṃ aśa ratnaya nama と西の馬宝に，oṃ paṃ śri ratnaya nama と北の大宝に，oṃ yaṃ khadga ratnaya nama と東南の王に，oṃ maṇi ratnaya nama と南西の后に，oṃ cakraya nama と北西の衆会に，oṃ sarva nibhyo ratnaya nama と北東の大きな蔵に，oṃ sūrya nama / oṃ candraya nama と日月の両方に三度ずつ花をそれぞれに供える．四洲と八中洲と須弥山と七海と鉄囲山をともなうものが内外の三密の供養で満ちることを加持する．供養は，主尊の天に内外の三密で満ちることを変化して供養することで，師とダーキニーにもそのように合わされる．それから供養と賞讃の二つと，懺悔と律儀の二つと，請願と廻向の二つと，身体と自分の二つを広げるべきである．利益は無量である．

身体の輪は，四大の自地を浄化し，paṃ から蓮華の，a から月の，raṃ から日の上に自分の身体の二十四境の自性を観想して，pu ja u / a ku ra / de ma ka / o ki o / ka la ka / hab sra ghi / so bu ma / si ma ku と三度述べることで境における二十四を地における十と観想するべきである．

それから刹那による空に続いて oṃ から風，raṃ から火，baṃ から水，laṃ から地，bruṃ から無量宮を起こした中で paṃ から蓮華，a から月，ma から日の上に hūṃ baṃ をまとめてから尊父と尊母が衆会をともなって生じ，身口意を加持し，位置を円満に分ける．

それから自分の三昧耶薩埵が心臓の hūṃ から光を放ち，智の輪を招いて虚空に入り，自分の身体が三千の大千で満ちていることを把握して，言葉で oṃ nama sarvatathāgata bhana bhana karomi と言うことで敬礼する．それから五種を供え，oṃ vajra puṣpe a hūṃ と言うことで花を頭に，香を鼻に，灯火を眼に，食べ物を口に，香水を心臓に供えるべきである．

それから尊父の八つの御足と尊母の八つの御足で賞讃し，oṃ padma kamale svāhā と天が自分自身のたちの場所に入ることを請願し，それから供養と賞讃の二つと，懺悔と律儀の二つと，請願と廻向の二つと，随喜と勧請の二つである．一般的賞讃は，師の相続をともなうことを賞讃することと，三種の客に対する一般的賞讃である．特殊な賞讃は，一切の勇者である尊父の八つの御足にまとめ，一切の勇

女の尊母の八つの御足にまとめて賞讃することである．供養は，自分の三昧耶の輪に生じた月の上の hūṃ から供養の明妃を広げて，oṃ vajra puṣpe a hūṃ と言うことで五種を供え，花を頭に，香を鼻に，灯火を眼に，食べ物を口に，歌を耳に，香水を心臓に供える．また，心臓の hūṃ から色金剛女と，声金剛女と，香金剛女と，味金剛女と，触金剛女が広がり，その oṃ sarva viśiprasara puca mega[28] samuntra a hūṃ により供える．真実の供養は，明妃に五甘露で満ちた頭蓋骨に障碍が無量であってもそのマントラで供えるべきである．

それから四ダーキニーと，身口意などの門にあたるものすべてにも広がるように供養すれば，上のように合わせられる．まとめたように供養をすれば，oṃ āḥ hūṃ により用意し，三つの供養を合わせてから供養する．

それから罪過の懺悔は，以前になしたことを後悔し，現在懺悔し，後に命を落としてもなさないことを誓願する．相続の懺悔と百文字によるものも懺悔である．

律儀の把握は，

> 三宝に帰依し，罪過と不善をそれぞれ懺悔し，すべての善を随喜し，仏と菩提を心で把握する．
>
> 最高の菩提の心を起こし，一切の衆生が自分で客のために最高の菩薩行を心に応じて行じなさい．有情に利益をなすために悟りを完成しなさい[29]．

と三度述べる．それから請願と廻向と随喜と勧請をなす．マンダラを自分の頭に積み重ね，二十四境の輪の供養がマンダラの儀軌である[30]．

世尊であるサンヴァラに敬礼する．

供物の加持と，供物による供養は，最初に自分の三昧耶のマンダラの前で，a から外が白で中が赤の頭蓋骨の中の四方に bi mu ra ṣu ma から五甘露を起こし，gho ku dha ha na から五種の肉などのバリの原因を注ぎ，その上に a から月輪が，覆

---

[28] 前出のマントラ (bi śi pra sa ra pu tsa me ga sa mun tra) と同じであるが，チベット文 (bi śa sra sara pu tsa me ga sa mu tra) には相違がある．

[29] 本偈は Padmavajra の**Abhiṣeka* の第 1 偈 (Tib. No. 2943, Pu 23b4) を始め，Abhayākaragupta の *Buddhakapālamahātantrarājaṭīkāabhayapaddhati*, D. No. 1654, Ra 190a6-7, Vairocanarakṣita の *Vajrabhairavavajraprakāśasādhana*, D. No. 2013a, Mi 237a3 などに見ることができる．

[30] 山口 2005: 178-180, 註 17.

いの上で hūṃ から五角の金剛の臍に hūṃ による特徴が一つ生じ，次に人頭を乾かす三つの炉石と，その次に roṃ から火輪が三角の roṃ により特徴づけられた上に，oṃ から弓のような幡により特徴づけられた風輪を観想する．oṃ から風が動かされ，roṃ から火が燃えることで額の中のものを載せ，自分の頭と首と心臓の光により白と，赤と，青を載せ，心臓の hūṃ の光により智の甘露を種々招いて，再び金剛と月も請願してから，三昧耶と智の二つは区別がないので[31]，oṃ āḥ hūṃ と三度述べる．バリを加持する．客を導くことは，自分の三昧耶のマンダラの有情の六種も勇者と勇女を起こし，右足により左の親指を押しつけ，両手は網の印契をともない，穴の上を隠してから言葉で，oṃ śrī vajra he he ru ru kaṃ ḍākinī jvala sambhara pheṃ pheṃ と述べることで，無量宮と屍林をともなう無量の智の輪が虚空と大地に広がることを招いて，それらに五供養を物や意により供える．それから供養と賞讃の二つと，懺悔と律儀の二つと，請願と廻向の二つと，随喜と勧請の二つを広げるべきである．

それから供物を供えることは，oṃ vajra aralli ho / ja hūṃ baṃ ho / vajra ḍākinī / samaya stoṃ / hrī śa ho / oṃ ā hūṃ と五度の間唱えて，右方向に周り左の境界に廻って供えるべきである．

それから八つの屍林に供えることは，oṃ kha kha khāhi khāhi sarvayakṣarākṣa sarvabhūtapreta / piśāconmādhāpasmāra / ḍākinyādhaya imaṃ baliṃ gṛhṇantu / samayarakṣantu / mama sarvasiddaṃ me / prayaccantu / yathaiva / yatheṣṭaṃ / buñjatha / pibatha / jighratha / mātikramatha / mama sarvakāratayā / satsukhavṛddhaye / sahāyakā bhavantu hūṃ phaṭ[32] と三度述べて，八つの屍林に供える．

それから母の土地の護り，地方を護る守護者を導くべきで，釣り針の印契をして導くマントラの oṃ kakka kaṭṭana / bandha bandhana / khakhkha khādhana / sarva duṣṭāṇāṃ / hana hana / ghaggha ghāṭaya / amukhasya hūṃ jaḥ[33] と述べることで招き，方々で蓮華座に座すことを観想し，五供養にその加持自身を供えて，その同じマントラに入り，amoghasya śāntiṃ kuru hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ svāhā と言うことで供え，それぞれの舌に hūṃ から金剛を加持し，舌の管の光で甘露を招いて，供養を観想

[31] 山口 2005: 163-164.
[32] 山口 2005: 298.
[33] Mori 2006: 501，森 2011: 150，山口 2005: 240.

し，甘露による供養は，oṃ khyetra pala pañcan amṛta khahi と七度，酒による供養は oṃ khyetra pala madana khahi ，バリの供養は oṃ khyetra pala imaṃ baliṃ gṛhṇa sarvasattvānāṃ śāntate cata khyena svāhā ［と述べる］．それから賞讃すべきで，

oṃ，一本の木と，屍林と，山と，谷と，洞窟と，十字路と，特別な空家と，職人の場所と，草原と，特別な水場にいる黒いもと，恐ろしいものと，とても恐ろしいものと，天のように一緒に頼るものと，

Kṛṣṇa と，Karālī と，Bībhatsā と，Nandātītā と，Vināyakā と，Cāmuṇḍī と，Ghorarūpī と，Umā と，

Jayā と，Vijayā と，Ajitā と，Aparājitā と，Bhadrakālī と，Mahākālī と，Sthūlakālī の瑜伽女と，

Indrī と，Candrī と，Ghorī と，Duṣṭī と，Lambakī と，Kambojī と，Dīpinī と，Cūṣiṇī の瑜伽女は，

大黒の姿で、大きな姿の女，牙を露出し，大きな額と頭蓋骨の飾り持ち，烏面女，大変をなし，剣と斧をもち，

そのように金剛大弓をもち，そのように偉大な女で，ダーキニーで，すべての行為を続けて成就させる女で，そのように金剛自在母，

如来の偉大な身体で塵もない瑜伽を鎮める女，金剛自在母を，この言葉によりすべてを残らずにここに集めなさい[34].

それから法を解説するべきで，

諸法は幻の如くで，清浄で，明らかなものに汚れがなく，把握されることなく，断じられることなく，原因と行為に正しく生じている．

などと述べられる．誓願が満ちて，

[34] *Vajraḍākamahātantrarāja* 18.63cd-71. Sugiki 2003: 90, 杉木 2003: 157-158. Cf. 山口 2005: 239-240, 静 2009: 84.

一切衆生に罪過はなく，一切衆生が楽になるように．自分で道から解脱した仏と結合しなさい．

救われていないものを救い，解脱していない者は自分で解脱し，現在こそ慈愛により瑜伽の説法の場を配置する[35].

と三度述べられる．

供物の加持と，供物による供養の儀軌である．

インドの偉大な賢者である Dīpaṃkaraśrījñāna［の著作を］完成する．チベットの翻訳官 Rin chen bzang po が翻訳した．

7. *Caturmahārājabali*

インドの言葉で，*Caturājamahābali-nāma*

チベットの言葉で，『四大王バリ』と言われる．

天母ターラーに敬礼する．

功徳の相続を生じ，中断を排除するバリの最高である四大王のバリを始める．

それから先行する無量の儀軌のように菩提心を修習して，特別なバリのよい所作を用意し，それから，自分の特別な本尊の天を修習して，身口意を文字で加持し，バリの svabhāva のマントラで空性を修習し，空の中から yaṃ から風輪を，その上に raṃ から火輪を，a から頭蓋骨の鉢を，その中に a を受けとってから甘露を，それから何肘だけ a から月輪の上に白い hūṃ が転じてから五つの頂点に穴をもつその白い金剛の上に a から月輪の中央に緑の tāṃ から光を下に放ち，甘露に溶けたものを上に放って，仏と菩薩の心臓から知恵の甘露の雨が老人にのみ降ることを観想して， ākāro のマントラを五度か七度述べ， āḥ hūṃ も五度か七度述べ，それが特別なバリの所作である．

---

[35] D. No. 1248, 209b3-4, D. No. 1258, Nya 284a6-7, D. No. 1294, Ta 176a4, D. No. 1439, Wa 239a7-b1, D. 1656, Ra 230a7-b1, D. 1672, La 198b6-199a1, D. 1821, Ngi 262a2-3, D. No. 1955, Mi 82b6-7, D. No. 2492, Zi 247a2-3.

それから，特別な客の所作は，前の虚空に paṃ から蓮華座の四葉が，臍にある ā からその月輪の上に緑の tāṃ の文字から光の放射を集めることで蓮華が tāṃ により示され，それから光をこちら側に集めることで尊母 Tārā が一面二手で，身体の色は緑で右は帰依を，左は茎をもつ蓮華を保持することを観想する．それから，知恵が招かれ，jaḥ hūṃ baṃ hoḥ sa と同化し，身口意の文字で加持する．それから，東の蓮華に持国天が一面二手で，白色の身体で，南の蓮華に増長天が青色の身体の一面二手で，西の蓮華に広目天が赤色の身体の一面二手で，北の蓮華に多聞天が黄色の身体の一面二手で，その四つが刹那に生じ，それから心臓から光を放つことで智慧薩埵が引き入れられ，身口意の文字で加持する．それから，その四つの舌を把握せずにそれぞれの hūṃ の文字が転じてから，舌の上に金剛を舌の下に管をともなうことでバリを直に設定してから請願を観想し，baliṃ takhāhi と三度供える．それから言葉の廻向は，

> 東方の乾達婆の魔と，南方の夜魔と，西方の鳩槃荼の魔と，北方の夜叉の魔と，十八の大魔と，八万の障類などに守護を請願する．

とは請願をすることである．それから智慧薩埵に行き，三昧耶薩埵を把握することなく観想する．バリが大地を浄化し，大地を損なう．四大王のバリを完成する．

パンディタ Dīpaṃkaraśrījñāna と翻訳官の dGe bshes sTon pa が翻訳した．

参考文献

Beyer, Stephan

1978 *Magic and Ritual in Tibet*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Mochizuki, Kaie

2018 “On the Works on the Ritual of Oblation attributed to Dīpaṃkaraśrījñāna,” 『印度学仏教学研究』66-3, 225-232.

Mori, Masahide

2009 *Vajrāvalī of Abhayākaragupta.* 2 vols. Buddhica Britannica 11. Tring: The Institute of Buddhist Studies.

Sugiki, Tsunehiko

2003 “A Critical Study of The Vajraḍākamahātantrarāja (II): Sacred Districts and Practices Concerned,”『智山学報』52: 53-106.

Wayman, Alex

1974 *The Buddhist Tantras, Light on Indo-Tibetan Esotericism*. New York: Samuel Weiser.

片山一良

1974 「バリ (Bali) 儀礼：歴史とその意味（上）」『宗教学論集』7: 79-91.

1975 「バリ (Bali) 儀礼：歴史とその意味（下）」『宗教学論集』8: 103-122.

静春樹

2009 「クリシュナ阿闍梨のガナチャクラ儀軌」『密教文化』222: 67-102.

杉木恒彦

2003 「『ヴァジュラダーカ・タントラ』第 1, 7, 8, 14, 22, 36, 38 章—試訳」『東京大学宗教学年報』21: 143-166.

宮坂宥勝

1967 「チベット所伝の Balimālikā 梵本について」『密教学』3: 73-90.

望月海慧

2007 「アティシャに帰される vidhi 文献について」『宗教研究』80-4: 314-315.

2011 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰されるターラー成就法関連の文献について」『インド仏教史仏教学論叢』: 93-115.

森雅秀

1994 「インド密教におけるバリ儀礼」『高野山大学密教文化研究所紀要』8: 174-204.

2011 『インド密教の儀礼世界』世界思想社.

山口しのぶ

2005 『ネパール密教儀礼の研究』山喜房仏書林.

（平成 28 年度科学研究費「密教思想と他の仏教思想との関係性—ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群を中心に—」［基盤研究(B), 26284008，代表: 久間泰賢］による研究成果）